

令和 4 年 4 月 15 日

(※受付番号)

教 育 長 様

代表者 校 園 名 : 大阪市立高殿小学校

校 園 長 名 : 梅原 直人

電 話 : 06-6951-3344

事務職員名 : 宮崎 貴子

申請者 校 園 名 : 大阪市立高殿小学校

職 名 ・ 名 前 : 校長 梅原 直人

電 話 : 06-6951-3344

研究コース
S 研究テーマ指定 (D)
校 園 コード (代表者校 園 の市費コード)
681513

令和 4 年度 「がんばる先生支援」研究支援 申請書

◇本研究の支援を受けたく、次のとおり申請します。

1	研究コース	コース名	S 研究テーマ指定 (D)	研究年数	継続研究 (2 年目)
2	研究テーマ	E S Dによるカリキュラム・マネジメントの推進 「主体的に問題解決に取り組み、行動できる児童の育成」 ～知りたい！調べたい！伝えたい！E S Dを意欲的に取り組むための工夫～ (研究テーマD カリキュラム・マネジメントの推進)			
3	研究目的	テーマに合致した目的を端的に記載してください。 <input type="radio"/> 学習指導要領でめざす「主体的に問題解決に取り組み、行動できる児童の育成」 <input type="radio"/> 人権教育を主とした本校のE S Dを「主体的・対話的で深い学び」の視点から構成検討 <input type="radio"/> E S Dにおける「身につけたい力」を意識した学習指導計画・E S Dカレンダー作成 <input type="radio"/> 人権教育と教科学習のつながりの中で、学びの相乗効果が得られる横断的な指導法の開発 <input type="radio"/> 知りたい！調べたい！伝えたい！児童が主体的に取り組もうとする課題の導入方法の開発 <input type="radio"/> 講師を招聘した公開授業・講演会を企画・運営し、研究の成果を大阪市全体へ波及させる <input type="radio"/> 研究内容を日々の実践に取り入れ、P D C Aサイクルによる指導方法の工夫改善をめざす			
4	研究内容	継続研究は、前年度の成果と課題を分析した内容を踏まえて記載してください。 E S Dによるカリキュラム・マネジメント研究の2年目は、前年度の成果・課題分析を踏まえE S Dの手法による人権教育を、本校の特色として生かしながらも「本市の学校園で共通して活用できるE S D」への発展をめざす。そのため新たな研究の視点①、②を設定した。 研究の視点① 子どもたちに疑問を持たせることができたか。 研究の視点② これまでの学習や自己の経験、「身につけた力」を基に、自分なりの考えを表現することができたか。 ① E S Dをさらに効果的に進める「教科学習」と「E S D」の横断的な運用モデルを大阪市E S Dスタンダードとしてカリキュラム・マネジメントの視点で開発する。 * 「教科学習」そのものをS D G sを学ぶ基礎の学習と位置づけ、「主体的・対話的で深い学び」の指導で、E S Dに必要な「論理的思考力」「言葉の力」「批判的に考える力」「主体性」を育成する。 * 人権課題によるE S Dの問題解決場面では、教科学習で得た「身につけた力」を児童が主体的に活用できるように進める。 * 6年間の系統的な学びの地図として、新型の「E S Dカレンダー」を開発する。 ② 「課題との出会いの場面を大切に」児童の主体性を引き出す指導技術の開発 * 「めざす子ども」の育成のため、今年度は特に「主体的に」という部分に焦点を当てる。 * すべての学習場面で、課題との「出会いの場面」を大切にして「積極的に問題解決に臨む姿勢＝主体性」を伸ばす指導方法を開発する。 * 授業中の「児童の発言や学習の様子」、授業後の「児童へのインタビュー」を動画記録し、児童の言葉から変容に至る指導プロセスを明らかにし効果的な指導方法を開発する。 ③ E S D研修会の実施 * E S D、S D G sへの知見を深め授業実践やユネスコスクールとしての学校運営を行う。 * 「主体的・対話的で深い学び」の視点で、児童が「知りたい！調べたい！伝えたい！」と意欲的に取り組む授業づくり研修を進める。			

研究コース S 研究テーマ指定 (D) 代表校校 園 コード 681513
代表校 園 大阪市立高殿小学校 校 園 長 名 梅原 直人

5	活動計画	<p>日程や内容など、研究の過程がわかるように詳細に記載してください。</p> <p>毎月1回以上の研修部会、年間を通じ系統指導・複数の実践・教材の見直し、実践事例の作成</p> <p>【めざす子ども像】…「主体的に問題解決に取り組み、行動できる子ども」</p> <p>【主 体 的】……………自らの課題に気付き、その課題を解決しようと試行錯誤し取り組む姿勢</p> <p>【学年の重点活動計画案】1年…仲間づくり、2年…仲間づくり、3年…基本的人権の尊重 4年…インクルーシブ、5年…文化の多様性、6年…平和（広島）</p> <p>【校内研究授業実施教科】… 総合的な学習の時間・生活科・道徳科で研究授業</p> <p>4月 * 前年度（1年目）の研究の振り返りと、前年度学年担当からの取り組み事項引継ぎ * 過去の取り組み・教材の点検と再評価、研究テーマ設定、目的・内容の検討 * 教育四部会（以降毎月実施） * ESD研修会（以降毎月実施）4月は、全体での共通理解と年間指導カリキュラムを確認、教科書の指導内容とESDを横断的に連携させたESDカレンダーを作成</p> <p>5月 * 講師を招聘したESD研修会「主体的・対話的で深い学びの授業手法について」 * 教員・児童へのアンケート作成・実施・分析 * 指導案検討会～研究授業公開（課題との出会い場面）～研究協議会～研究授業の事後活動（課題の解決・まとめ場面）公開（以降毎月実施）</p> <p>6月 * 大阪大空襲の取組、ESD研修会「アクティブ・ラーニングの授業手法と主体性」</p> <p>7月 * 子ども平和の集い、1学期の実践について、教材・指導案・実践事例を集約</p> <p>8月 * 先進的研校等への視察、研究会参加、1学期の実践を振り返り実践事例を作成</p> <p>9月 * ESDカレンダー確認更新、全市公開授業の指導案作成、ESD研修会「伝達講習」</p> <p>10月 * 平和（広島）の取り組み、公開授業の実施細案・提案原稿の準備</p> <p>11月 * 研究発表会・研究協議会・記念講演等の細案作成、研究紀要データ作成</p> <p>12月 * 2学期の実践について、教材・指導案・実践事例を集約、研究紀要データ完成</p> <p>1月 * 全市公開の研究発表会・研究協議会・記念講演会の開催、参加者アンケート集約</p> <p>2月 * 教員・児童へのアンケート実施、事前アンケートとの比較・分析 * 研究のまとめ作成、ESDカレンダーの更新確認</p>
6	見込まれる成果とその検証方法	<p>大阪市教育振興基本計画に示されている、<u>子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上</u>および<u>教員の資質や指導力の向上</u>について、見込まれる成果を端的に記載し、その成果について、客観的な指標により必ず数値で示すことができる検証方法を記載してください。</p> <p>【見込まれる成果1】</p> <p>「人権教育」を主としてESDを行うことにより、児童（生徒）指導の三機能「自己決定」「自己有用感」「共感的人間関係」を重視した教育指導を、より推進することとなる。また「主体的・対話的で深い学び」を進めることにより、「共に生き、共に育つ」という共感的人間関係をより深く実感し、人権感覚の研ぎ澄まされた「人に対してやさしい児童」が増加する。</p> <p>《検証方法》</p> <p>アンケート項目「毎日の学校生活は楽しい（どちらかと言えば楽しい）」と答える割合を80%以上とし、アンケート項目「友だちとなかよくしている。（どちらかと言えばなかよくしている）」と答える割合も、80%以上とする。（R3数値：楽しい93.7、なかよく96.1）</p> <p>【見込まれる成果2】</p> <p>ターゲットとなる学年の取り組みや研究授業を行う複数教科、および基礎的・基本的な学習を行う教科について、ESDにおける「身につけたい力」を意識させる指導を行い、「わからないところを、わかる」ように、「できないことを、できる」ように指導と評価の一体化をしていくことにより、授業が分かると実感する児童が増加する。</p> <p>《検証方法》</p> <p>アンケート項目「授業がよくわかる（どちらかと言えばわかる）」と答える割合を80%以上とし、令和4年度の小学校学力経年調査における標準化得点を、同一母集団で比較し、いずれの学年も前年度よりも向上させる。（R3数値：88.5、標準化得点/全学年全教科平均100.6）</p> <p>【見込まれる成果3】</p> <p>ターゲットとなる学年の取り組みや研究授業を行う複数教科、および基礎的・基本的な学習を行う教科について、学んだことを生かす表現の場のあり方について、ICT活用による授業の工夫改善を行い、「自ら学べる」ように、「自ら語れる」ように育成していく。これにより、ICTを使った学習に取り組んでいることを実感する児童が増加する。</p> <p>《検証方法》</p> <p>アンケート項目「学校は、ICT（大型テレビ、デジタル教材やタブレット）を使った学習に進んで取り組んでいる（どちらかと言えば取り組んでいる）」と答える割合を90%以上にする。（R3数値：学校が取り組んでいる97.9、児童個人が主体的に取り組んでいる75.9）</p>

6	見込まれる成果とその検証方法	<p>【見込まれる成果4】</p> <p>ターゲットとなる学年の取り組みや研究授業を行う複数教科、および基礎的・基本的な学習を行う教科について、学んだことを生かす表現の場のあり方について、対話活動による授業の工夫改善を行い、「自ら学べる」ように、「自ら語れる」ように育成していく。これにより学校の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができ、かつ自分の考えを伝える「発表のスキル」が向上する。</p> <p>《検証方法》</p> <p>アンケート項目「学校の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」に対して肯定的に回答する児童の数を前年度より3ポイント上昇させる。</p> <p>【見込まれる成果5】</p> <p>《検証方法》</p>				
7	研究成果の共有方法	<p>◆研究発表【必須】 <u>報告書提出日（令和5年2月24日）までに必ず行ってください。</u></p> <p>○研究発表の日程・場所（予定）</p> <table border="1"> <tr> <td>日程</td> <td>令和 5 年 1 月 18 日</td> <td>場所</td> <td>大阪市立高殿小学校</td> </tr> </table> <p>◆代表校園HPでの共有【必須】</p> <p>他の共有方法を計画している場合は記載してください。</p> <p>大阪市の授業のスタンダード wakux2.com-bee への実践事例、指導案等の資料提供</p>	日程	令和 5 年 1 月 18 日	場所	大阪市立高殿小学校
日程	令和 5 年 1 月 18 日	場所	大阪市立高殿小学校			
8	代表校園長のコメント	<p>「4 研究内容」について紙面が限られていたので、前年度の課題分析について概要をお示しし、研究2年目の決意や、本研究が大阪市教育の発展に資する役割を明らかにいたします。</p> <p>「高殿の人権教育」は、未来に向かって大切に継承していかなければならない地域の財産です。研究1年目は、過去の人権教育で使用してきた教材（財産）を再評価して、これからの社会の担い手として、本校が育成をめざす「子ども像」を明らかにし、その実現のために、新たに学年進行に応じたESDの学習に再構築（新たな財産を形成）する創造的活動でした。</p> <p>ESDと教科を横断的に扱い、より効果的な一貫した指導を組み立てるために、カリキュラム・マネジメントの手法を使いましたが、研究を進める中で、いわゆる「カリマネ」は、教育課程だけにとどまらないことに気付きました。取り組みを円滑に進めるための教職員配置。教育実践に必要な教材や機材の手配に必要な予算措置。これらも含めるとカリキュラム・マネジメントは、スクール・マネジメントそのものです。もちろん、年度途中で予算執行そのものへの調査と再編成を行うとともに、教育実践を円滑に進めるための校内組織の在り方も再検討を進め、令和4年度から校内組織を刷新させました。</p> <p>ESDにおける「身につけたい力」を意識した学習活動を行うことで、ESDは自然な形で子どもたちの学力を向上させます。これは、数値が証明しています。したがって、「高殿だからこそ実施できるESD」ではなく、今日的課題であるSDGsを意識し、ユネスコスクールとしての本校の特色を生かしながらも、本市の学校園で共通して活用できる「大阪市ESDスタンダード」へと発展させることが研究の肝であり、これは今年度研究のターゲットです。</p> <p>ESDの授業づくりに関し「教科連携をカリキュラムマネジメントの視点で行う時、『ESDの指導とつながりのある教科』と『つながらない教科』に分かれてしまうが、果たしてそれでよいのか？」、「ESDと教科学習が、いわば乖離したような状態でよいのか？」という課題も明らかになりました。これは、研究内容の①へと考え方や取り組み内容を整理し、研究を進めます。また、「児童が主体的に課題解決に臨む姿」の設定・評価にあたり、「今の学びは、本当に主体的と言えるのか？」、「児童の『主体性』を引き出すためにどうすればよいのか？」という疑問点も浮かびました。これは、研究内容の②へと考え方や取り組み内容を整理し、研究を進めます。研究内容①、②はともに学力向上にも直結し、本市すべての学校園にとって有用な研究と言えます。</p> <p>本校のESDは、次世代を担う子どもたちが、自分の未来に対する当事者意識をもって「主体的に問題解決に取り組み、行動できる」ことを目標にしています。ESDの学びは、将来のキャリアにも直結します。身の回りにある問題が、地球規模の課題に直結していることを認識し、その場で選択できる最善の行動ができることが、現在の社会を持続可能な社会へと導く、リーダーとしての行動につながります。引き続き、2年目の研究を進めてまいりたく存じます。</p>				